

「元禄六年四月二十八日 米子での供述」

唐人式人之内通辞申方

一 朝鮮国内とうねぎと申所之者

通辞

名ハあんびやん
歳 四 拾 三
在所ウラさんの者
名ハトラヘ歳三拾四

下ノへ

一 国元朝鮮之内とうねぎの前釜山を当三月廿七日朝食給、出船、則日及暮竹嶋へ参着仕候

一 拾人乗之舟壹艘

内

船頭 あんびやん

船子 よちえんき

同 とくせんき

同 ちんつうえん

鍛冶 ばたい

去年参候者

大工 せぶりき

船子 やかい

同 いはんにん

同 とらへ

老人ハ名不覚

以上拾人

飯米拾俵

但 五斗三升入

塩貳俵

但 三人して壹俵持壹石余入

一 拾五人乗壹艘ハうちやん村之者、内壹人は去年参候もの、当三月十七日二先達而

竹嶋江参居申候、私共之船ハ跡より参着仕候

一 拾七人乗壹艘ハ三月廿九日二国元出船、是又則日竹嶋へ参着仕候

船数以上三艘人数四拾貳人つれ

一 竹嶋と申所朝鮮にて聞及申候、此度参着申候三界之しやくらんより鮑取候様ニと被

仰付ニ而津無之候、銘々之商売ニ鮑、若布取ニ参候旁竹嶋へ参候式人之者、私共へ

参候様ニと申聞申ニ付、竹嶋へ参鮑、めのは取申候、朝鮮之内うるさんと申所ニ船

賃指上申候

一 竹嶋へ揚り様子見申候処二日本之諸道具鍋、釜何角有之候、朝鮮之道具ニ而無之、

日本之遣道具有之候間、私共参嶋ニては有之間敷と存、去年参候式人之者共ニ様子

相尋候へハ式人之者共申候ハ、去年ハケ様之道具無之由申候、然共私ハ日本之諸道具ニ而有之候間、風次第ニ朝鮮へ帰可申と風待仕居申候、其内ハ獵仕、鮑、めのは取居申候処ニ日本船參、私兩人乗せて召連參候

右之首尾ニて御座候 以上

元禄六年酉ノ卯月廿八日

(資料2)

(四月二八日)

「控帳」

元禄六年

一、例年竹嶋江鮑取ニ參候船渡海候処、彼嶋ニ唐人居申候付て、獵不罷成戻り候付、唐人式人船ニ乗せ參候由、此節荒尾修理米子ニ罷越居申候故、修理より申越。依之江戸へ七日割之御飛脚差出ス。江戸より御左右有之内ハ、唐人大屋九右衛門手前ニ差置、大和組中之内作廻人申付、足輕番人ニ、付置候様ニ修理へ申遣事。

(五月二一日)

一、米子唐人あんびじやん、氣晴ニ出可申由、色々わやく申候由、修理迄申来候へ共、外江出候儀不通ニ無用と差図申事。且又酒給申度由申候へ共、是又昼夜二三升より上は無用之由申達事。
右相談之上ヲ以、修理迄申達事。

(資料3)

(五月二五日)

「御用人日記」

元禄六年

一、伯州米子町人大屋九右衛門・村川市兵衛、例年竹嶋江船頭共為致渡海鮑取申候。去年渡海之処、朝鮮人罷有獵仕付、鮑取事不成罷帰候処、又今歲渡海候得は、朝鮮人獵仕罷有候故、鮑取不申ニ付、彼朝鮮人之内、通詞老人外耆人以上兩人、同船ニて米子へ罷帰候。因茲御国御家老より右之趣以飛脚被申越候。就夫、今日十日、早々御聞役を以御月番御老中土屋相模守様江朝鮮人口上書・同持参之さずが・懷中之書付三通、并村川・大屋船頭之口上書共被遣、段々御老中江右之趣被仰入置候処、御聞届被成由ニて、同十三日御月番土屋相模守様江御家来被為呼候付、吉田平馬參上候処、彼朝鮮人長崎江被遣、御奉行衆段々之子細被仰達御渡可被成旨被仰渡候。為御請小谷伊兵衛被遣之。但、朝鮮人口上書其外之品々相模守様江被留置候。且又、竹嶋江残居申朝鮮人も一所ニ長崎江被遣候様被仰渡候処、平馬申上候は、竹嶋と申所江は輕渡海難成所ニて御座候。例年ニ、三月渡海仕、五、六月之頃帰帆之外ハ渡海難成候。其上、村川・大屋船頭竹嶋より罷帰候節、朝鮮人も可罷帰躰御座候間、最早朝鮮人彼嶋居申間敷由、段々申上候得は、御聞届被成由被仰也。

資料4

元禄六年
五月二五日

右之御口上書其候ニテ御使者持参差出候筈也。

一、右朝鮮人長崎江被遣様、宮城越前守殿江被仰談候は、大坂迄陸を被遣、夫より長崎江出船可仕候哉。但、又直ニ長崎江渡海可仕候哉。此段勝手次第被成度旨被仰入候得は、其段ハ御勝手

次第之由。因茲、此段御国江も申遣、尤路次ニテ逗留（留）口（口）は不苦、障之事有之候得は、其段早々

江戸江被申越候様被仰遣。

一、大坂迄陸罷越、夫より出船仕候様子候得は、大坂御在番土岐伊予守殿・松平五郎右衛門殿江御付届入可申由ニテ御口上、并御書御案詞御国参。

追加、長崎迄陸参候由、御国より申来。

御用人日記

資料5

六月十日

御用人日記

元禄六年

一、御国より先月廿八日之御飛脚到来。先月十八日御嘉例之通御城内御祈禱相濟候御礼来。

朝鮮人長崎江被遣付、御使者山田平左衛門・平井甚右衛門兩人申渡旨也。

但、甚暑之砌長途御使者故若病人有之ため兩人被仰付之。

一、医師竹間玄碩被遣之申渡候旨申来、玄碩儀外科本道共ニ相勤候故申渡旨也。

一、朝鮮人食物拵候ため二次御料理人老人申渡旨、且又朝鮮人老人ニ足輕四人宛副遣之由申来。

一、海陸共ニ何れニても御勝手次第可被遣由候故、海上ハ無御心許、陸を被遣之也。

一、奉書五束宛長崎御奉行御兩人江被遣之。先年寄舟長崎江御送之時分、毛利惣右衛門被遣節、

御音物有之付、此度も被遣。

一、長崎へ御送舟有之節、同所之町人下見助右衛門と申者有之。年肝煎諸事首尾能候付、此度も御頼被成由。先達山崎主馬より書状遣候様御家老差図仕、因茲、金子千疋被遣、主馬より相達ス。

(資料六)

(五月二六日)

同日

一、從江戸今月十六日之御飛脚到来、朝鮮人之儀公儀江御窺之処、御聞届、長崎江送可被遣由被仰出之旨申来、此儀二付今日不時之寄合於將監宅二相談有之事。箕浦藏人・河嶋源七・山崎主馬・御目付共参会之事。

「控帳」

同日

一、長崎江之御使者人柄遂吟味、山田兵左衛門・平井甚右衛門兩人申渡之事。右之御使者老人二ても不苦間敷候へ共、途中先方二ても手支二有之候へ如何と存、兩人申渡也。右之御使者之儀、江戸より御家老共存寄次第二可申渡旨、志摩より申来候へ共、大殿様御在国之儀故、相談達御耳申付候事。

同日

一、道中為用心、番廻り二てハ無之候へ共、本道外科兩様相勤候付て、竹間玄碩申付事。

同日

一、今度朝鮮人長崎江被遣儀、何も遂相談、海上無心元付て、陸地被遣筈二相極、万々其御用意夫々之役人江申渡候事。

同日

一、朝鮮人米子より爰元へ呼寄申節、米子組之内兩人道中召連参候様二荒尾修理江申渡事。

同日

一、去年毛利惣右衛門長崎江被遣候節、彼地町人下見助右衛門諸事肝煎、先方之首尾も宜敷二付、此度唐人参節、万々御頼之由、先達て山崎主馬より以飛脚金子千疋被遣候事。
右朝鮮人一巻、別帳二記候付て、控令省略也。

(五月二八日)

同日

一、朝鮮人米子より参候節、見物猥無之様二と御家中へ相触候趣、如左。今度朝鮮人米子より参候節、又ハ此元発足之節、家来末々見物罷出候とも、猥無之様堅可被申付候。其内女わらんべ見物罷出儀は可為無用、朝鮮人狼藉も可致様子相聞候間、被得其意、組中へも此旨可被申渡候。以上。

五月廿八日

同日

一、米子より当地迄之道筋江も、右之通相触候様二刑馬へも申渡候事。且又泊々二て其所之庄屋・年寄罷出、不寝番等堅申付候様二と刑馬へ申聞也。

(資料七)

(八月九日)

一、山田兵左衛門・平井仁右衛門儀、朝鮮人長崎江送届、御奉行江首尾好相渡、先月廿四日御国江帰着。

但、長崎江罷越候節道中、御領・私領共御馳走有之。六月晦日彼地江参着。翌朔日、御奉行所江相渡候由、長崎御奉行川口撰津守殿・山岡対馬守殿より御返書来り。御国より差越、此御届御老中様之内江御達可被成旨也。御領・私領二て御馳走之御礼之義ハ、御中陰あきし以後可被仰遣筈也。

「御用人日記」

元禄六年

元禄六年
七月一日

朝鮮國慶尚道之内東萊之郡釜山浦之安ヨクホキ、蔚山之朴トラヒ与申者ニ而御座候、我々儀、蔚山与申所より竹嶋与申所江砲、若布持ニ三月十一日ニ出帆仕、同廿五日ニ寧海与申所ニ参着仕、其所を同廿七日辰之刻ニ出帆仕、酉之刻竹嶋江参着仕、右之砲、若布持逗留仕居申候所ニ日本人四月十七日ニ我々罷在候所ニ罷出、則着物杯入置申候ひら包をおさめ、我々兩人彼方之船ニ乗せ即刻午之刻ニ出帆仕、鳥取江五月朔日未刻罷着申候、常ニ竹嶋之儀砲、若布大分御座候段承及申候ニ付、船砲艘二十人に乗組、寧海与申所迄罷越候処、右拾人之内砲人ハ相煩申ニ付寧海江残置、九人乗組右之竹嶋江罷越申候、拾人之内九人ハ蔚山之者、同砲人ハ釜山浦之者ニ而御座候御事

一我々乗船類船共二三艘之内一艘ハ全羅道之船与承及申候、則人数十七人乗、同砲艘者十五人乗、慶尚道之内加徳与申所之者と承及申候、我々儀日本之様ニとらえ被越候付、彼者共儀即刻朝鮮江罷帰候共、何方ニ参候共前後之儀不存奉候御事

一此度我々共砲取ニ参候嶋之儀、常ニ朝鮮国にてハムルグセム与申候、日本之内竹嶋与申所之由ハ此度承申候御事

一今度爰許迄罷越候内、警固之衆より御馳走ニ而罷越候、布木綿衣類等も被下申請候、委細因幡ニ而之口書ニ申上候通相違無御座候御事

一我々共常ニ祝着を念し申候御事

一朴トラヒ歳三拾四、安ヨクホキ歳四拾ニ罷成候、然所ニ因幡ニ而歳四拾三与申上候由ニ御座候得共、是又言葉耽与通シ不申候故相違も可有御座哉与奉存候御事

右之通竹嶋江参候朝鮮人申上候付、書付差上申候 以上

元禄六年癸酉七月朔日 宣 末次七郎兵衛 印

通詞 大浦格兵衛 印

加勢藤五郎 印

宋對馬守内

濱田源兵衛 印

覚

- 一 布帷子 七
- 一 湯かた 壹
- 一 風呂敷 貳
- 一 鏡 壹面
- 一 唐笠 壹本
- 一 布手拭 三ツ
- 一 煙器 貳本
- 一 皮多葉粉入 貳
- 一 布帯 壹筋
- 一 木綿布子 壹
- 一 布足袋 貳足
- 一 かや 壹張

右者從伯耆守様朝鮮人ニ被下之候分

木綿拾	五
布帷子	四
まんきん	式
木綿単物上斗	壺
木綿綿入下斗	壺
打帶	式筋
木綿帶	式筋
笠	式
木綿足袋	壺足
さすか	壺本
虎のきはか之指	壺
船手形	三枚
木札	式枚

右者朝鮮人持渡候分何茂無違請取申候 以上

宋對馬守内

濱田源兵衛 印

此書付ハ^{實録}林老人之名ニ而差上申候、是も江戸表江被差上候由源兵衛方より申越

○同六年七月迎護之御使者嶋雄慶右衛門長崎より帰着在之、竹嶋ニ而被捕候朝鮮人六月晦日長崎江致到着、勿論朝鮮人申分鳥取ニ而之口書ニ相違無之候得者、此段江戸表江御注進ニ被及候故、江戸御下知次第朝鮮人御使者へ可被相渡候、夫迄御使者逗留之儀如何ニ被思召候間、帰国候様ニ与御奉行より被仰渡、朝鮮人不相受取帰国在之也

〃長崎御奉行川口攝津守様、山岡對馬守様より之御返書左ニ記之

去月五日之覚書同廿日到來拜見仕候、然者竹嶋与申所江朝鮮人四十人程罷越、致漁候付、松平伯耆守殿より右之内式人被留置、其段御老中江被仰上候處、当地江被差送候之様ニ与被仰渡候間、本国江可被差返旨從御老中被仰渡候、依之御使者被差遣、委曲御口上之趣致承知候、朝鮮人一昨晦日伯耆守殿より送來請取之、則召出遂穿鑿候處、於江府從伯耆守殿御老中江被仰上候趣相違無御座候、右朝鮮人御使者之衆江可相渡候得共、江戸江及注進御下知到來次第相渡可申候、夫迄ハ当地ニ被差置候御家來衆江預置申候、御使者之衆御下知到來仕迄被相待候儀如何ニ存候間、被罷帰候共勝手次第ニ被仕候様ニ与申達候 恐惶謹言

七月二日

山岡對馬守

景助御在判

川口攝津守

宗恒御在判

宋對馬守様

尊館

〃是より前七月朔日此方御使者慶右衛門長崎逗留之内、川口攝津守様より罷出候様ニ与之儀二付、慶右衛門罷出候處、両御奉行御対面被成、朝鮮人因幡ニ而之口書之趣、爰

資料 9

元禄六年

竹島紀事

○同六年八月十四日長崎御奉行所江朝鮮人迎使一宮助左衛門并此方御留守居濱田源兵衛被召寄、御奉行川口攝津守様、山岡對馬守様御同然二被仰渡候ハ、今日江戸表より御到来在之竹嶋江罷越候朝鮮人對馬守殿江相渡候様被仰付候間、源兵衛江御預ケ置被成候朝鮮人式人迎使相受取令帰国候様ニ与被仰渡、則助左衛門請取候也

〳右同日濱田源兵衛江御奉行所より被仰渡候ハ、平生之朝鮮濱人江者長崎逗留中 公儀より御賄被仰付候得とも、今度竹嶋江罷越候朝鮮人者御賄不被仰付候との儀被仰渡候〳同日源兵衛御奉行所江申上候ハ、朝鮮人對州迄之船中若難風ニ逢候事茂可在之卜、左様之節難義不仕様ニ御證文御渡被下候様ニ申上候所、弥御證文可被仰付旨被仰渡

資料 10

元禄六年

朝鮮国慶尚道之内東萊之郡釜山浦之者宍人、蔚山之者宍人当三月竹嶋与申所江罷渡候付、右式人之朝鮮人宋對馬守方家来江相渡之、警固船ニ為乘、對州江差越朝鮮国江送戻候間浦々相違有之間敷候、自然水薪無之、風波烈惡敷所繫候節者、無滞様に可被相通候 以上

元禄六年酉八月十六日

山岡對馬守 印
川口攝津守 印

所々浦

番衆中

〳朝鮮人宿御使者屋江被仰付、宿番御徒士四人組之者四人被仰付、朝鮮人内外江出入不仕様申渡

〳長崎より彼地在役之通詞宍人加勢傳五郎朝鮮人江相對来ル

〳朝鮮人御国着船ニ付長崎御奉行所より被相附候、浦触御證文被差返候ニ付御奉行所江御状被差越ル

〳右往復之御状左ニ記之

貴札令拜見候、竹嶋江罷越候朝鮮人之儀江戸表より就御差図、拙者家来江御渡、去二日無異儀對府江令着岸候、向後竹嶋江渡海不仕候様ニ可申付之旨、從御老中被仰越之由奉得其意、則其旨彼国江可申遣候、且又右之朝鮮人江被差添候海路之御證文尙通今度令返進候 恐惶謹言

九月五日

川口攝津守様

山岡對馬守様

去五日乍尊報御飛札今日相違拜見仕候、竹嶋江罷越候朝鮮人先頃御家来衆江相渡差遣候処、今月二日無異儀對府致着岸候之由、向後竹嶋江渡海不仕様可被仰付旨、從御老中御差図付其段申上候處、其旨彼国江可被仰遣由致承知候、且又右之朝鮮人江差添遣候海路之證文尙通被差返請取申候 恐惶謹言

九月廿四日

山岡對馬守

景助御在判

川口攝津守

宗恒御在判

宗對馬守様

竹島紀事

元禄六十年

○ 同六年九月四日大目付門野九郎左衛門を以朝鮮人問情被仰付也

朝鮮人口書

一 我々兩人之内唐人者釜山浦之者アンヨグト申候、唐人ハウルサン之者バクトラヒト申者ニ而御座候、我々一艘二十人乗組候處、内唐人相煩申ニ付寧海ヨソノカイ与申所ニ残置九人乗竹嶋ニ罷渡候

船頭 キムヨチヤキ

キンバタイ

キンデントイ

ウルサン之者 セコチ

イハニ

キムトグソイ

チャグチャチュン

右吉艘ニ乗組ウルサンより仕出、三月十一日乗組仕、同十五日ニウルサン出船仕、同日ウルサン之内ブイカイ与申所ニ罷着、同廿五日ブルカイ出帆仕、慶尚道之内エンバイ与申所ニ罷着、同廿七日辰之刻エンハイ出帆仕、同日酉刻竹嶋江罷着申候、エンハイ与竹嶋之間五十里程も可有之歟与覚申候、朝鮮江原道より東ニ当り申候、嶋之程朝鮮牧之嶋より少大ニ見へ申候、山之様子險阻ニシテ高く御座候

彼嶋ニ鳥類獸類魚類ニ至迄別而いなもの無御座候、祢ニ大分居申候

彼嶋に古キ小屋をこほち候道具御座候、如何様日本人之住跡之様ニ被存候

彼嶋之名を朝鮮ニ而ムルグセム与申候

彼嶋之儀日本ニ而御座候も朝鮮之地ニ而御座候も一円存不申候、日本ニ罷渡候而日本之地ニ而御座候由初而承申候

類船之儀吉艘者全羅道之内シユンデン与申所之船ニ而人数十七人乗組、同吉艘ハ慶尚道之内カトク与申所之船人数十六人乗組、式艘共ニ四月五日彼嶋ニ参候、式艘之人数船頭を初為存者唐人も無御座候

我々船ニ食飯之用ニ米拾俵塩三俵乗せ参候、其外荷物無御座候、尤類船之様子も我々乗船同前ニ而御座候

我々彼嶋ニ罷渡候儀砲、若布大分有之由承存持ニ罷越候、類船とても其通御座候、別而商売之心懸ニ而曾而無御座候

彼嶋ニ而日本人与商売曾而不仕候、類船之儀者如何様ニ御座候も不存候

我々之儀今度初而彼嶋ニ罷渡候、乗組之内キンバタイ与申者、去年彼嶋江一度持ニ罷渡、様子為存者ニ御座候故我々茂罷渡候

カトク之船へ兩人彼嶋江前以吉度渡り候者有之由承及候

我々彼嶋ニ罷渡候儀、別而忍ひ申儀曾而無御座候、去年もウルサン之者廿人程罷渡候、尤公儀より之差図与申儀も無之候、自分之持ニ罷渡候

彼嶋ニ朝鮮国より渡り候儀、古より渡来候哉、近年より渡候哉、左様之様子者曾而存不申候

一 我々彼嶋ニ罷在候内小屋を掛、小屋之番ニハクトラヒ与申者残置候処ニ四月十七日ニ日本船一艘参り、天間ニ七八人乗候而右之小屋ニ参ハクトラヒを捕、天間へ乗せ、尤小屋ニ置候平包吉取乗せ罷出候付、アンヨグ其所ニ参断申、ハクトラヒを陸江揚

可申与存、天間ニ乗候へハ、早速船を出し兩人共ニ本船ニ乗せ、早速出船仕、隱岐
国ニ同廿二日ニ罷着申候、其間者洋中ニ罷在候

一 同廿八日ニ隱岐国出船仕、五月朔日ニ取鳥罷着、三十四日逗留仕、取鳥罷足仕、同
晦日長崎表江着仕候

一 取鳥罷足仕、長崎表江廿六日振ニ罷着申候、其間所々ニ御馳走被仰付候、膳部一
汁七八菜程宛ニ而御座候、兩人共ニ乗物ニ而長崎迄罷通候以上

九月四日

〇 此時 天龍院公御近所役加納幸之助を以被仰出候ハ、竹嶋之儀磯竹嶋とも申、先
年 大猷大君御代彼嶋江磯竹弥左衛門、仁左衛門与申者住居いたし居候を召捕被差
出候様ニ与 光雲院公江被仰付、則此方より被召捕被差出たる事在之候、然者竹嶋
之儀日本伯耆之内之嶋与 公儀ニ被思召候ハ、伯耆之太守より弥左衛門、仁左衛
門召捕被差出候様ニ可被仰付之所、御国江被仰渡候ハ朝鮮之竹嶋与被思召上たる事
与相見へ候間、右之次第第一 公儀江御伺被成思召之程得与御聞被成候上、朝鮮
江可被仰懸哉与之御事ニ候所、此時之衆儀 公命を以朝鮮江被仰進候ハ、違難ニ
及申間敷との事ニ而、押而参判使を以被仰遣候由也

同六年十月竹嶋一件之儀被仰遣候大差使之正官多田與左衛門、都船主門山郷左衛門、封
進寺崎与四右衛門渡海被仰付、礼曹参判江以御書簡、近年貴国之船日本之内竹嶋江罷越
候付、重而不参様ニ申付追返候所、当春又々貴国之漁民四拾人程竹嶋江罷越漁仕候故、
為後證其内式人召捕終始之様子具ニ領主より 公儀江案内有之候へハ今度之儀者被差
返候、重而彼地江不罷越候様ニ堅可申渡旨從 公儀蒙仰付候、如斯之仕形至而大切成
事候条、急度可被仰付候、則兩人之者今度送返右之趣使者委曲口上ニ申合候与之儀被仰
遣也

〇 多田與左衛門持渡礼曹参判参議東萊釜山江之御書簡之写左ニ記之

日本國對馬州太守拾遺平

義倫 奉書

朝鮮國禮曹参判大人 閣下

金廳秋暮 恭惟

貴國安寧

本邦一揆茲告

貴城瀕海漁氓比年行舟於

本國竹島竊為漁採極是不可到之地也以故主官

詳諭國禁固不可再而乃使渠輩盡退還矣

〓同日茶禮之節正官布衣風折着用、都船主封進侍奉ハ素襖着、伴人十六人召連罷出禮式常之通相濟

元禄六年十二月十日

〓竹嶋江罷越候漁民二人召連候、警固として横目改濱田源左衛門へ代官樋口太郎兵衛相附罷出候所、馳走訊朴同知、金判事兩人此方警固二人江致挨拶、彼方之者大勢召出し右漁民二人為請取之、則繩掛候躰二相見候

「竹嶋江罷越候」

元禄八年

七月十二日

竹嶋江罷越候

一内々承候得者、竹嶋江參候貴国之漁民共、唯今之朝廷之御前ニ被召出直ニ御尋被成候処、彼者共申候ハ、竹嶋ニ而我々を召捕繩を掛囚人ニ仕、江戸へ七日目ニ送届候、然所ニ、江戸ニ而ハ存之外相替ケ様ニ可仕儀ニ無之候処ニ、無調法を仕候由ニ而、彼擲捕候日本人を斬罪ニ被仰付、我々二者衣服等を被下、中々御丁寧成御馳走ニ而御座候、長崎江被送遣候節も道中ニ而者駕籠ニ御乗せ、左右よりあふき候而參候処、長崎ニ而对州之役人請取候後ハ、金銀を奪取散々之仕掛ニ而御座候、对州江參候而も又囚人之様ニ仕候、江戸ニ而之御馳走之様子を以御了簡可被遊候、江戸之御心ハ中々ケ様ニ而無御座候処ニ、我々を囚人ニ仕、再彼嶋江不罷渡候様ニ与有之候段ハ、偏ニ对州之心ニ而御座候由、申上候由ニ候、依之朝廷実ニ尤与思召、公命ニ而無之儀を対馬守申入、彼嶋を日本之属嶋ニ極、公義江之忠節ニ可仕趣意被思召、御恨深右之返簡甚相違之儀を被仰聞候与存候、此一端至而大切成儀ニ御座候、先ハ魚氓式人因幡之太守之城府を江戸へ參候与申儀、第一了簡違ニ而候、貴国之行程ニ仕候得ハ、因幡之城府より江戸迄何程之所ニ而候、然上者竹嶋より江戸迄僅七日之内ニ者決而難到行程にて候、扱又、初竹嶋ニ而漁氓を擲捕候ハ、前年重而不參候様ニ与堅申渡差回候処、又々侵境候ニ付、其狼藉を咎申、実ニ擲捕候事ニ候、因幡之城府江參候時分丁寧ニ致馳走、或ハ長崎江送遣候道中ニ而駕籠ニ乗せ金銀を与、左右よりあふき杯仕候ハ日本之国風ニ而、至而大切成囚人程ケ様ニ仕事ニ候、或ハ食傷或ハ怪我或ハ其罪之源を考、自害等仕候而者、因幡之城主從、公儀之御咎を被蒙事ニ候故、随分致馳走、彼囚人之心を安シ無別條様ニ存入、致安堵候様ニ与、態仕掛為申其手筋ニ而候、貴国之儀者不存候、日本之国風ニ而ケ様ニ仕候段ハ、訊官之内ニハ常談之席ニも伝承候人可有之与存候、扱長崎ニ而此方之役人請取候後、金銀を奪候与申候ハ、了簡有之事情、彼漁氓共道中ニ而我俣を申、今日者參問敷杯与荒シ申候ニ付、警固之日本人殊外及難儀、金銀を与へ、色々賄候得者合点仕候由ニ候、兎角大切成囚人ニ候故、早々届度存、漁民之心ニ叶候様ニ斗仕、漸送届候由ニ候、此方之役人共、彼警固之人之咄にて承候へハ、非法成仕方耳多、実ニ貴国之御為ニ恥敷儀ニ而候ニ付、御為与存、彼金銀を取警固之日本人ニ返進仕、非礼を繕申たる由ニ候、是ハ彼警固之人之存入を如何ニ存、貴国之恥を省為仕事ニ候処、却而自分ニ奪取候様ニ申候段、扱々心外成仕合ニ而候、其外役人共仕掛不宜様ニ申候ハ、因幡之城主之馳走ニ引抗為申故ニ而候

欄外「抗ノ字 本書ニ如斯」

聊に成仕掛も無之候得共、常体之漂流人之様ニも無之、此度者大切成囚人ニ而候付、警固等 調敷為仕候、依之、了簡違を以何角与為申事与存候、不久事ニ候得者、今以御吟味候ハ、実者能相知可申候、彼漁民之申分実事ニ而候ハ、初度之返簡之時分之御當役之衆も快御返簡者有之間敷事ニ候得共、唯今之朝廷御吟味之時分ハ漁民共之申分已前ニ違詐誕多、朝廷之御憤ニ罷成儀を相加へ申上候様ニ致推察候、今之朝廷御憤被成候程之儀を、初之朝廷御聞乍被成、右之快御返簡者有之間敷事ニ候へハ、下々之申分計を以一決被成、对州を御恨、其上両国之大事ニ及候儀を被仰聞候段者、至而難心得御心底ニ奉存候、殊更 公命ニ而無之儀を書簡相認候儀、決而不罷成候者慥成 公儀之証人御座候、則輪番之和尚衆ニ而候、尤書簡之上封をし、先日書上候ニ付略仕候

(資料15)

元禄九年

六月廿三日

敷与奉存候、被仰付候趣次郎ニ申聞追而可申上候由申上候、其節松平伯耆守様御留守居様吉田平馬、半兵衛より先ニ加賀守様御側ニ被召出、加賀守様平馬ニ御意被成候ハ、兎角達而因幡江訴訟可申上与朝鮮人申候ハ、於因幡取上不被成候而者成間敷候、半兵衛儀諸事平馬江申談候様ニ与被仰付、兩人共ニ御次ニ退候、竹島紀事

〳御次ニ而、吉田平馬ニ様子半兵衛相尋候処、平馬申候ハ、隱岐国より朝鮮人十一人船一艘ニ乘六月四日伯耆江着船仕候内、五人出家ニ而御座候、伯耆ニ差置候家老方より因幡江茂早々申越候、御先代より此方ニ而者何事も不取上、長崎御奉行所江遣候様ニ与被仰付置候付、因幡江参り候ニ及不申候由申聞候得共、致立腹、水竿ニ而此方之者を打倒し、我々斗先ニ参候、竹嶋ニ者朝鮮船三十艘余も参り居候由申候付、翌五日ニ朝鮮人因幡江遣し申候拾一人之内、先年竹嶋江参り候朝鮮人アンヒチャク諸事案内をも能存、大形日本言葉を申候、訴訟之儀者、其元様之儀ニ而御座候様ニ聞へ申候、乍去加賀守様江者其元様之儀何角与申候とハ難申上候付、何事も言葉通し不申候由申上候、就夫加賀守様御意被成候ハ、筆談ニ而埒明可申儀候、筆談者不仕候哉与被仰候付、筆談を仕候而者訴訟之儀を受込候同前ニ御座候故、筆談不仕候旨申上候、兎角其元様之儀、何角与申候間因幡江通事侍衆を被遣可然奉存候、アンヒチャクを先年竹嶋江参候節御国元朝鮮ニ而しはりなと不成様之事を申候由被申候付而、半兵衛申候ハ、左様之儀者曾而不承候、今度之朝鮮人御領分江参り候次第并、御先代異国船之儀ニ付被仰渡候御奉書御写被下候様ニ与申入、夫より罷帰ル

慶尚道東萊の安龍福は、母親を見舞うために蔚山に行き、たまたまそこで出会った僧雷憲らに、自分が渡海した鬱陵島が物産が豊かな島であることを話した。雷憲らはその話を聞いて渡海することにし、寧海の劉日夫らと一緒に鬱陵島に出かけた。

島には多くの日本船が来ており、仲間は近づくのを恐れたが、安龍福は「鬱陵島は境域である。なぜ日本人が越境侵犯しているのか、お前たちを縛ってやる。」と大声で怒鳴った。

これに対して日本人たちは「我々は松島に住んでいる者で、たまたま魚を取りに来ていただけで、今帰ろうとしているところだ」と答えた。

そこで、安龍福は「松島というのは子山島であり、そこもわが国のものだ、お前たちはどうしてそこに住んでいるのか」と詰問した。

【逃げる日本人を追跡して船を曳いて子山島にいたった】

翌朝になって船に乗って子山島へ行ってみると、日本人たちは大釜を並べて魚を煮ているところであった。安龍福は杖で釜をたたいて突き破り、大声で叱ったので、日本人たちは釜を片付けて船に乗せ、帆をあげて去っていった。

そこで、安龍福らは船に乗って追いかけて、風にあつて玉岐島(隠岐島)に漂着した。隠岐島主がやって来て、何の目的で来島したかと問うので「先年ここに来た時、鬱陵・子山両島は朝鮮の領土である【として日本との境界と定める】と書いた関白(徳川将軍)の書契【文書】がある。

しかし、そのことが徹底しておらず、今また越境侵犯をしたのはどういうことか、伯耆州へ伝えて欲しいといった。隠岐島主は伯耆州に伝えたというが、いつまでたつても回答がなく、腹をたてて船を出し伯耆へ向った。

伯耆では「鬱陵子山両島監税将」と称して、伯耆州の使者に通告したので、人馬を出して迎えてくれた。

安龍福は青帖裏の官服を着て、黒布の冠をかぶり、皮靴をはいて輿に乗り、他の者は乗馬で城下へ入った。

安龍福は藩主と対座し、諸役人が下座に並んでいるなか、藩主から何のためにやって来たかと質問された。そこで安龍福は「先年ここに来た時に、両島は朝鮮の領土であるという関白の書契をもらった。ところが、帰途に対馬島主が取り上げてしまい書契を偽造して度々使者を送るなど勝手なことをしている。この事を関白に上訴して対馬島主の罪状を述べたい」と答えた。

伯耆藩主は上訴することを許したので、李仁成に上訴文を書かせたところ、対馬島主の父親がやって来て「もし、この上訴文の内容が知られると、息子は重い罪になって死

ぬことになるので止めてもらいたい」と懇ろに頼んで来たため、関白に上訴することはやめて、代りに、先に越境して来た十五人を摘発して処罰した。

さらに、伯耆島主は、「兩國がすでに貴国の所屬になつたからには、領域を侵す者や対馬島主が邪まなことをした場合には、国書を作つて訳官を通して送つてくれれば、重く処罰をすることになるだろう。ついでには食料を与えて送つてやる事にする」と申し出たがそのことは辞退した。

『竹島（鬱陵島）をめぐる日朝關係史』内藤正中著から抜粋

資料(17)
元禄九年

○同九年十月 天龍院公御再住之御賀儀并 靈光院公嚮應相兼、兼光之 訳官而使、竹島紀事 下同知、宋判事渡海二付、十月十六日於御屋敷 天龍院公而使江御対面、竹嶋之儀因幡伯耆江附屬与申事二而茂無之空嶋二而、伯耆之者罷越漁仕候迄二候所、近年朝鮮人罷渡り入交り如何二候故、重而此方之漁民渡海不仕候様ニ可被仰付与之儀、於江戸表ニ被仰渡候旨、而使江天龍院公御直ニ被仰渡之

〓而使江被仰渡候御書付二通左二記之

口上之覚

先年同氏対馬守方より竹嶋之儀ニ付、以使者申達候処、其節取次之人使者江被申聞候趣歸国之刻拙者江申聞候故、其趣於江戸御老中迄御物語申上候得者、彼嶋之儀因幡伯耆江附屬与申二而も無之、日本江取候与申事二而茂無之、空嶋二候故、伯耆之者罷渡致漁候迄二候、然処、近年朝鮮人罷渡入交如何二付、最前之通対馬守方より申遣候得者、朝鮮江道程も近ク伯耆より者程遠き由二候間、重而此方之漁民渡海不仕候様ニ可被仰付与之御事二候間、御誠信之段忝可被存候

右之通存之外、結構ニ被仰付候間、此為御礼、從礼曹此方迄書翰可被差渡候、東武江委細可申上候間、此旨具朝廷方江可被申達候、以上

口上之覚

当夏朝鮮人十一人船一艦ニ乗組、訴詔之儀有之由二而因幡江罷渡候処、朝鮮筋之御用之儀者此方一手ニ被仰付、他国ニ而曾而御取次無之国法ニ而候故、訴詔之分ケ不被聞召、被追還候由御老中より此方江被仰聞令承知驚入候、古来より之申合も有之事ニ候処、此方を差置、他国江罷越訴詔有之由申入候段 上之思召之程如何可有之哉与無心元存候、此段朝廷方御心入を以為被差渡儀ニ候得者、不届千万之御仕形与存候故、急度以使者可申断儀ニ候得共、若、下々之仕態二而も可有之哉与存候故差控候、向後ケ様之儀有之而者、朝鮮国之為ニ茂決而宜ケ間敷候間、此旨朝廷方江急度可被申達候、以上

〓右之趣御口上書斗二而者訳官得与難落着候故、真文ニ御認被下候様ニ与兩使願出候付、左之真文相認裁判を以渡之

真文二通左二記之

彼此之所大願者耶

左右既有

面言於譯使而然且無分行李奉

書契以來者似是

左右深

念舊約不欲規外送差之

意故先此修牘展布多少送于萊館使之轉致統帝

諒昭不宣

戊寅年三月

禮曹參議李

善博

(資料 18)

之二十一年春

從朝鮮國來候書簡之和文

貴國御平安之由珍重存候、先頃、譯官罷歸候節、委細御口上之趣為申聞、致承知候、
 鬱陵嶋之儀、朝鮮之地ニまかひ無之候段者、地理之書ニ茂載置候而、堺目名前之事ニ
 御座候得共、遠近之沙汰ニ覃申事ニ而無之候、竹嶋と鬱陵嶋とハ、一嶋ニ而二名之儀
 者、其許ニ者御存知之事ニ候、名ニハ違有之候得共、此方之地ニ而候、日本人重而、
 不罷渡候様ニ被 仰付候由、委被仰聞、隣交之好幾、久別条在之間敷与大慶存候、
 此方ニも役人を申付、時々致吟味、双方之者出入難不申候様ニ可申付候、●去年、致
 漂流候者之儀、被仰聞候、海邊之者共、大形者、船ニ而渡世候故、風烈敷節者、日本
 之地江致漂流候事、常之儀ニ候得者、約條ニたかひ他所江人遣杯との御不審有之間敷
 事ニ候、乍然、書付差出偽申候段者、不届ニ存候故、籠舎申付、以後之見せしめに致
 し、其外海邊江急度申付、此之儀弥、不相替互に誠信を守候間、界目ニ事之出来不申
 候様ニ与、兩國之願此事ニ御座候、此度口上を以譯官ニ被仰渡、別ニ、使札を不被差
 越候段者、定之外ニ使者往来無之様ニ被思召候故与察存候、依之、今度以書翰委細申
 述、東萊江送遣候、其元江差越候様ニ与申付候、不宣

戊寅 三月 日

同年七月廿一日平田直右衛門召寄、刑部大輔江返答達之

一 竹嶋江日本人不相渡候様ニ被 仰付旨、去々年、譯官渡海之節口上ニ而被申渡候処、

一 今、從禮曹書翰出来候、然者、以平田直右衛門段々御自分了簡之趣被申越候旨、令承知候

一 今度之書翰ニ候、厚御礼可申来候処、有増之書面ニ候之故、書翰者、不指出御自分取

繕御禮之段、東武江被申上候由、可被相違候旨、一通りハ、尤候へ共、最前も御自分中二而、彼是、御申渡候様朝鮮国ニ而疑申由二候、左候得者、又、件之通疑候而者如何可在之候哉、其上、返答ニあたり候而、被申越候時、其節之品々より其通ニ而難差置儀も、在之時は、違却にも可在之哉、此度、書簡之内ニ、良幸々々、与在之候へハ、珍重存候旨茂、相聞二候間、書簡東武江被差上、令披露旨、たいいていの返簡被差渡可然与、各申談候而、則、直右衛門ニ其旨申聞之書翰、各ニ入披見候

一 此度之儀者、其通二候へ共、重而之為ニ候間、口上ニ而、最前、朝鮮国之不念之儀も有之時、輕義ニ茂、委御礼申来候、此度者、厚御禮も可申来事之処、良幸々々と申ての書面少々難心得候、幾久通用申儀ニ候へ者、重而之為与存候間、御自分分存寄之通申述候由、捨言葉ニ口上ニ而被申渡、可然与存候、已上

七月廿一日

宗刑部大輔様

右之段達 御耳、此通二而、可然と被 仰出、此書付御右筆衆、調させ御城にも書留置、手前ニ茂留候而、相渡候旨申達、直右衛門江渡之

元禄十二年卯十月十九日、宗刑部大輔使者、家老大浦忠左衛門を以被申聞候

口上

竹嶋之儀ニ付、去年以使者、奉伺、御差函之通、当春返翰相認差渡、譯官を以、東菜江相達候、其節彼地江差置候家来之者、口上を以申渡候者、朝鮮国不念之儀も有之、殊、輕キ義にも、委、御禮申来候、此度者、厚ク御禮可被申越處、良幸々々と与て之書面、難心得候得共、東武御誠信被成御座候故、結構被 仰出候、朝鮮国ニ之仕形宜候而、如此相濟候与被存候而者、以来之妨ニ罷成候事濟たる上ニ候得共、存念申達候由、口上ニ而申届候処、彼方ニ申候者、段々、首尾好相濟兩國之大幸此事情、委細朝廷江、可申達由ニ而、書翰請取之、竹嶋之一件無殘相濟、珍重奉存候、朝鮮國江、差越候返翰之写、差上之候

右之趣從国元申越候 已上

十月十九日

宗刑部大輔使者

大浦忠左衛門

日本國對馬洲刑部大輔拾遺平 義真 奉復

朝鮮國禮曹大人 閣下

向領

華機憑審

貴國撥清呷喻倍恒承

資料別添付

天保九年五月二十三日

朝鮮舟着岸一卷之覚書

隠岐國島後

長 三上三丈、下口或丈

一朝鮮舟着艘 幅中二而三上口一壹丈或尺
深廿四尺或寸

但、八拾石程積可申候、

檣 式本

帆 式ツ

梶 壹羽

櫓 五艇

蓬

木綿之はた二ツ櫃二立申候

木碇 式艇

かうそ綱四房

敷物ごさ犬ノ皮

船中人教拾巻人

安龍福

李裨元

金可果

三人名不書出、年不書出

雷憲

雷憲弟子

衍習

三人名生不書出候

一安龍福 午歲四十二

冠ノヤウナル黒キ笠、水精ノ緒、アサキ木綿ノウハキヲ着申候、
腰札ヲ着テ着申候、

表二通政太夫

安龍福 年

甲午生

表二住東萊 印彫入

印判小キ箱二人、耳カキヤウシ小キ箱二人、此或色扇着テ持申候、

一金可果 年不書出

冠ノヤウナル黒キ笠、木綿ノ紐、白キモメソノウハキヲ着申候、扇

ヲ持申候、

一興國寺ノ住持雷憲 歳五十五

冠ノヤウナル黒キ笠、木綿ノ紐、細美ノウハキヲ着、扇ヲ持申候、

己巳閏三月十八日、金鳳山之朱印状雷憲所持仕候ヲ出シ申候ニ付、

則写申候、

康熙二十八年閏三月二十日

金鳳山朱印ノ書付、雷憲所持仕候ヲ出シ候ニ付、則写シ申候、

箱茗ツ 長卷尺、は、四寸、高四寸

鈴ノカナク在リ、内ニ算木在、竹ニ而作之申候、

かけご三硯ヲ仕組申、筆墨在リ、

一坊主衍習 歳三十三下申候、

一右安龍福・雷憲・金可果三人江在番人立会之時、朝鮮八道之図ヲ八

枚ニメ所持仕候ヲ出シ申候、則八道ノ名ヲ書写、朝鮮ノ詞ヲ書付申

候、三人之内、安龍福通詞ニテ事ヲ問申候得入答申候、

一舟中二荷物^ニ在之候哉と尋候へハ、干鮑少、和布少在之候、是ハ食事之サ^ニ二仕候由申候、後二船中□書付別ニ御座候、

一船中二坊主五人乗七候儀尋候へハ、竹嶋見物ヲ望ニ付同道仕候由申

一沙門宗派五人共二宗か又別宗か何宗かと尋候へハ、雷鷲其間ノ書付

二答ヲ書記申候、然共其分ケ^ケ不明様ニ相聞へ申候、依之翌廿一日

二、宗旨名・伯州へ参候わけ・荷物等之義書付相尋候へハ、病人李

裨元筆者ニ書出又書付有リ、則差上申候、

一安龍福申候ハ、竹嶋ヲ竹ノ嶋と申、朝鮮国江原道東萊府ノ内ニ

鬱陵嶋^{ウルルン}と申嶋御座候、是ヲ竹ノ嶋と申由申候、則八道ノ図ニ記之、

所持仕候、

一松嶋ハ右同道之内子山^{シラカ}と申嶋御座候、是ヲ松嶋と申由、是も八道之

図ニ記申候、

一当子三月十八日、朝鮮国朝飯後二出船、同日竹嶋へ着、夕飯給

申候由申候、

一舟数十三艘、人言艘三九人・十人・十人・十人・十人・十五人程宛

乗り、竹嶋迄参候由、人数之高間候而も一円不申候、
一右十三艘之内十式艘ハ竹嶋ニ而和布・鮑ヲ取、竹ヲ伐リ申候、此事

ヲ只今仕候、当年者鮑多も無之由申候、

一安龍福申候は、私乗候船ニ八拾番人伯州江参、取鳥伯耆守様江御断

之義在之體越申候、順風悪布候而、当地へ寄申候、順次第二伯州江

渡海可仕候、五月十五日竹嶋出船、同日松嶋江着、同十六日松嶋ヲ

出、十八日之朝隠岐嶋之内西村之磯へ着、同廿日二大久村江入津仕

候由申候、西村之磯ハあら磯ニ而御座候二付、同日中村江入津、是

も凄悪候故、翌十九日彼所出候而、同日晚二大久村之内かよい浦と

申所舟懸リ仕、廿日二大久村江参懸リ居申候、

一竹嶋と朝鮮之間二十里、竹嶋と松嶋之間五十里在之由申候、

一安龍福ととらへ三人、四年巳前西夏竹嶋ニ而伯州之舟ニ被連まひり

候、其とらへも此度召連参、竹嶋ニ残置申候、

一朝鮮出船之節、米五斗三升入二十表積参候得共、十三艘之者共給申

候二付、只今者飯米乏ク成候由申候、

一伯州用事仕廻、竹嶋江戻リ、十式艘之舟ニ荷物ヲ積七改仕、六七月

之頃扁国仕リ、殿江も運上ラ上ケ申答之由申候、

一竹嶋ハ江原道東萊府ノ内ニ而御座候、朝鮮国王之御名クモシヤン

天下ノ名主上、東萊府殿ノ名二道方伯、同所支配人之名東萊府使下

申候由申候、

一四年以前癸酉十一月、日本ニ而被下候物共書付之帳志冊出シ申候、

則写之申候、

一三人江在番人对談終リ舟江三人共二歸リ、其後二書簡ヲ差出シ、干

鮑六包、内吉包ハ大久村庄屋へ、五包ハ在番人へ之心入にて指越候

得共、六包共二返シ申候、其書簡之興ニ生菜・青菜・実菓譜と御座

候二付、苴・ねふか・權実・芹・生姜など遣シ申候、尤書簡之返事

ヲ毛相添遣申候、

一廿一日、安龍福より書付出シ申、飯米二切レ夕飯より食ニ絶候由申

越候二付、舟江庄屋与次右衛門罷越、様子相尋候へ者、飯米無之致

難義候、朝鮮ニ而他国之舟参候得ハ致馳走候処ニ、此元ニ而ハ大凡

成義之様ニ申候二付、庄屋申候ハ、爰許も異国舟被放風参候節ハ飯

米等其外所相心之儀ハ御調被遣事ニ候、其方義取鳥伯耆守様へ訴詔

在之参候と之申方ニ而候間、飯米等致用意可被参事と申候得者、不

審尤成義ニ候、竹嶋十五日ニ出候得者、其原日本之地へ着可申、日

本之地ニ而ハ御如在無之と存、右之通ニ候と申候、然共無覺速候間、

船中見可申と庄屋申候得者、成程見候様ニと申二付見分仕候得者、

飯米入候吠之内ニ白米三合程残り申候、庄屋申候ハ、飯米切レ申候

段見届申候、爰元ハ去年作不熟ニ而米払底ニテ候、少々在之候而も
悪米ニ而候、不昔候ハ、少ハ才覚可仕由申候得者、致才覚くれ候様
ニト申二付、在番所より参候迄ハ延引二付、大久村地下より取合白
米四升五合遣之申候、朝鮮升壹斗壹升五合ニ斗立手配を申候、追付
在番より米参候ヲ則白米二仕、壹斗貳升三合遣之候得者、朝鮮升三
斗ニ斗立手配を申候、右兩度之米、廿一日之夕と廿二日三度之飯米
在之由申二付、其積リヲ以追々米才覚仕、時々二飯米あてかい渡し
申候、

一拾巻人之内名歳知し不申分、猶又宗門之義銘々ニ願ハ書記、伯州へ
一詔之わけ書付出之候様ニと申候得共、始ハ心得候由申候処、廿二
日之朝三至リ其事共書出入ニ不及候、伯州へ参、委細可申上由、重
而ハ其間事無用ニ可仕由書付出之、則指上ケ申候、

雷憲廿二日陸揚リ候時之装束ハ

一ウハキハ白木綿、ねつミニ似タルヲ着シ申候、

一帽子ハ本朝禪宗ノ用候様成ヲ着シ申候、地ハサイミ、ウラハ白キ

麻

一珠数も禪宗之用候様成ヲ持申候、玉之数十斗在之、笠ハ着不申候、

弟子衍習ヲ揚リ申候、装束雷憲と同断、

但、衍習カ珠数ノ玉太サ同ク、数ハ多相見申候、

右、廿二日、安龍福・李裨元・雷憲・同弟子陸へ上リ候事ハ、西風

強ク船中不静、物書候義不成候間、陸へ上リ書可申と申候二付、海

辺近キ百姓家へ入リ候処、其時三至リ前々書付斗書出し申候、廿一

日舟ニも認懸リ申候書簡、今度之詔一巻と披存、長々と仕たる下

書ヲ致シ、本書をも認懸リ（覽）「候へとも廿二日陸へ上リ相談仕、

かへ」候様三相見申候、併前々書付ニ而始終大体わけ聞へ申候様

ニ奉存候、其通ニ而差置申候、

一廿一日より廿三日迄も風雨強ク御座候而、西郷へ朝鮮舟廻シ候事、
引舟仕候而も難成候二付而、番舟申付役人共付、大久村ニ其俵指置
申候、惣而十八日より西風毎日強ク舟路ノ通い不罷成荒申候、
一石州へ為右御注進松岡弥二右衛門渡海申付候二付、廿二日、弥次右
衛門呼戻シ、高梨左衛門・河嶋理兵衛大久村江遣置申候、飯米等
追々見斗庄屋方より渡させ候二付、朝鮮人悦申由ニ而書付指出申候、
則差上申候、

右、此度朝鮮人一巻之書付并朝鮮人出候書付目録二記之、弥次右衛門
持参仕候、口上ニも可申上候、以上、
五月廿三日
中瀬彈右衛門
山本清右衛門
石州御用所

朝鮮舟在之道具之覺

一白米

叭三合程残り申候

一和布

三表

一塩

三表

一干鮑

壹束

一薪

壹メ

一竹六本

「長六尺八寸、同三尺五寸、同三尺」但、一尺廻リ

一刀巻腰

「此刀武具ニハ難用處相成ものニ候」

一脇指巻腰

「此脇指、柄ハ脇指ニ候へ共、料理なといたし候二付、

包丁同前」

一鍬四筋

「何れも鮑取器物之由、長柄ハ四尺斗」

一長刀 壹

一半弓 壹

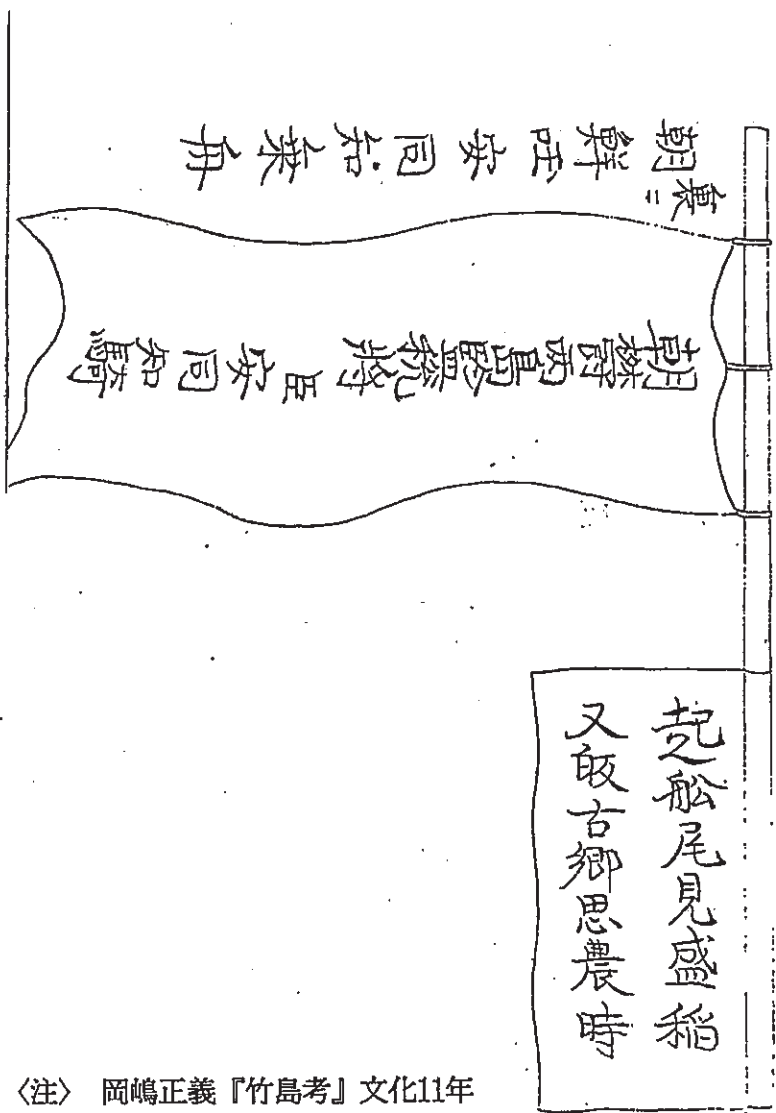
- 一 矢 筒箱
- 一 帆柱 式本 内〔舊〕「舊本八八尋、菅本八六尋」
- 一 帆 式端 内〔舊〕「方五枚下り六枚、方四枚下り五枚」
- 一 梶 菅羽 菅丈四尺五寸
- 一 ミなわ網 〔舊〕「わら、かつら、しな」
- 一 とま 拾枚斗 内〔舊〕「式枚長々五尺、横一丈三尺、殘八同（日）」
- 本ノとまより大キ
- 一 犬皮 三枚
- 一 敷こさ 三枚 帆こさノ類ニ而候
- 右之通見分仕候処、紛無御座候

朝鮮人俗名

- 李裨元 金可果 柳上工 金甘官
- エウカイ 〔舊〕「此字相尋候へハ書不申、下々敷、毎度末座二居申候」
- 安龍福共、六人俗
- 僧名
- 興国寺 雷憲
- 靈律 丹冊 騰淡 衍習 〔舊〕「雷憲弟子」
- 右五人坊主
- 合拾巻人

朝鮮之八道

- 京畿道
- 忠清道 平安道 咸鏡道 黃海道 慶尚道
- 江原道 〔舊〕「此道ノ中ニ竹嶋・松嶋有之」



朝鮮吐安同知兼舟

〔註〕 岡嶋正義『竹島考』文化11年
 (鳥取県立博物館蔵)